

複数性のエコロジー

篠原 雅武著

世の中はどんどん便利に、清潔になり、快適さは増し続けている。にもかかわらず、世界が洗練されるにつれ、身の置きどころのない気持ちが強まり、不安を感じることもある。本書は「エコロジー」を意外なかたちで捉えなおす思想家ティモシー・モートンの哲学に迫るものだが、そこで垣間見えるのは、この不安の正体である。

現代社会の不安の正体

現代社会の根幹をなす科学的な態度にしたがう限りわれわれはこの世界を抽象的なシステムとして捉え理解しようとする。そしてこのシステムを自身の快適さが増すように働かせ利用しようとする。その時、人間は世界を、あたかも「道具」であるかのようにみなす。たとえば、地球環境を温室効果ガスで気候変動するシステムと見なし、温暖

化を食い止めようとする「エコロジカル」な態度も、同じ考え方に根ざしている。

しかし、こうした態度をどけ続けられ、世界から複雑さや豊かさや失われてしまふ。そのようにして単純化した世界で「道具」をうまく使えないければ、自分の居場所がない感覚に悩まされることになる。だとすれば、利用する対象として環境を捉えるのではなく、ひとりのとりか身のままの等身大の世界と向き合わねばならない。これこそが「エコロジカル」な態度だと本書は説く。

しかし、それはさう簡単なことではない。そこには「道具」を扱う時のような便利なマニュアルはないからだ。本書でも、この先にある世界が、明確に示されるわけではない。それもそのはず、モートンの思想は、同時代の音楽やアートからも刺激を受けながら、いままでに育ちつつある過程なのだ。著者の思考も、それに呼応しながら、同時に展開していく。

はつきりとした形は見えないものの、本書からは、新しい時代の生き方の指針となるだろう思想の胎動が、確かに感じられる。この体験こそ、変革の時に生きる人間に与えられた特典だろう。(門脇耕三・建築家、明治大専任講師)



(以文社・2800円)

しのはり、また、1975年神奈川県出身、京都大非常勤講師、哲学、思想史を研究。2016年ベネチア・ビエンナーレ国際建築展の日本館制作委員の一人。著書に「生きられた「ユートピア」など